



新神回卷

新井筑後守保君美回
野宮守中將藤原定長御答

上巻

内舎番長近藤これらの次第番頭は江州の

史部 使部 門部 伴部

此の者目らり又しつちる者より

儀内 資人 健児 大長 雜色 致免

紫衣 長階 從 相摸 最 物 扱

右の

念人

射れおの時色いもの名目お又しつちる人より

押領使

此の者目らり又しつちる者より

青侍 青女

此の者目らり又しつちる者より

文官 武官

此の者目らり又しつちる者より

舞司

此の者目らり又しつちる者より

此の者目らり又しつちる者より

此の者目らり又しつちる者より

此の者目らり又しつちる者より

此の者目らり又しつちる者より

此の者目らり又しつちる者より

此の者目らり又しつちる者より

此の者目らり又しつちる者より

此の者目らり又しつちる者より

此の者目らり又しつちる者より

此の者目らり又しつちる者より

此の者目らり又しつちる者より

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a large initial letter, possibly 'D' or 'Dn', followed by several lines of text. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a large initial letter, possibly 'D' or 'Dn', followed by several lines of text. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

階身藏の御方より一々階身立村の御方より各名に
記

近所

近所近所府官人の名目より凡た近所府友より凡た得た
近所近所府官人の御方より近所近所府官人の御方より
近所近所府官人の御方より近所近所府官人の御方より
近所近所府官人の御方より近所近所府官人の御方より
近所近所府官人の御方より近所近所府官人の御方より

吏部

近所近所府官人の御方より

使部

近所近所府官人の御方より近所近所府官人の御方より
近所近所府官人の御方より近所近所府官人の御方より

和訓はうたれともは彼子新の中池駆抜の者ら

門部

近所近所府官人の御方より近所近所府官人の御方より

伴部

近所近所府官人の御方より

樓内 近所近所府官人の御方より

これら百使者より凡た近所近所府官人の御方より
近所近所府官人の御方より近所近所府官人の御方より
近所近所府官人の御方より近所近所府官人の御方より
近所近所府官人の御方より近所近所府官人の御方より
近所近所府官人の御方より近所近所府官人の御方より

健

色はあざやかなるに似たりと云ふは
難色はあざやかなるに似たりと云ふは
色はあざやかなるに似たりと云ふは
色はあざやかなるに似たりと云ふは
色はあざやかなるに似たりと云ふは
色はあざやかなるに似たりと云ふは

人長

これに神皇正統記の事

信使

賀茂春日と東遊の言はるる者との對稱人との信使の事
相模最平

あつた信の事

物に換へ

あつた信の事

念人

競馬村れ等の事と右勝負の勝者對の事
念人の事

押領使

これに後國の事と云ふは
或臨時の事と云ふは
押領使の事

昔侍昔女

唐装束。 生装束。 海装束。

且割のりら次袴より作下衣の次は一日時あやちやの
何色の比よりやえらぬ

一 半辟月 一 赤衣 一 箱

以上名目并其割名ありの次其申福のきちり衣の日とん
然近あり白のきよんはえん何あふひてぬ

一 大口 前張 紅張大口 名目并其割名ありの次

一直衣 引直衣 烏帽 子直衣 小直衣 袴衣 直衣
無補直衣 長袴 袴衣 直衣

一 出衣 其割名并其割の次より作下衣の
以上右一物お名もその次其割名并其割の次より作下衣の

一 奴袴 一 下袴 下袴の時下袴と申ひらぬ下袴は下袴の
下袴は作下衣の次より作下衣の次より作下衣の

一 半尻 名目并其割名ありの次

一 袴衣 白襖袴衣 白襖布袴衣

袴衣布衣二種あるは袴衣は袴の布を以て作るは襖袴は袴の
半何色の袴衣は袴衣又其色或半袴袴の或は袴の
て其の用袴衣は袴衣の袴衣は袴衣の袴衣は袴衣の袴衣は袴衣の

一 袴襖 其割名并其割の次より作下衣の次より作下衣の

一 小忌 赤日袴 袴袴 其割名并其割の次より作下衣の

一 淨衣 其割名并其割の次より作下衣の

一 水干 水干袴 水干草袴

水干は水干と名付るは水干の草袴は水干の草袴は水干の草袴は
水干の草袴は水干の草袴は水干の草袴は水干の草袴は水干の草袴は

一 長袴 付袴と長袴と名付るは長袴は長袴は長袴は長袴は長袴は

一 轡

鏡

鏡傳何れなるべし
鏡は良馬の者なり
鏡は良馬の者なり

一 差繩

藤芳終

紫系終

棟終

緋終

具割り何れ終

一 差繩

菊赤文

山吹

紫系

村流

一 鞞履

赤鞞履

織物鞞履

透鞞履

一 虎皮鞞履

鹿皮鞞履

鞞履の割り何れ終

一 差繩

綾赤文

布赤文

白布

一 車

飾車

青絲毛車

尼眉車

唐尻車

一 半節車

檳榔毛車

細代車

八葉車

右名目より作りし後の大八葉小八葉車ともいふ何れ終

一 隨身装束

小隨身

小者いふ何れ終

一 雲繪袍

柳子熊

雲繪布袍

此の袍は云々あり又雲繪終ありともいふ何れ終

一 白襖袴

白襖袴

茶色脛中

褐衣 白袴

一 壺脛中

附

錦 柄襦 袷腰 錦袴

此の物に割り何れ終あり

一 馬副装束

馬副装束の者なり

一 褐衣袴

舌地

一 手振装束

手振装束の者なり

一 藥袋布

一 小舎人量装束

小舎人量装束の者なり

狩衣上下 毛布、水干袴 睡中

雜色装束 雜色小雜色如木雜色あしき者あしき者あしき者あしき

平礼 上六丁 白張上下 乱緒

車副装束 副車といぬ何いぬ何いぬ者いぬ者いぬ

烏帽子 ころも 襖袴

牛飼装束

水干 葛袴

馬副より下牛飼迄の装束旧にたお小お見へる物等と作らる

一居飼 一馬部

一飼丁

兼おるもの者より中飼丁の字少者といふなり

一會個装束

錦帽子 紫纈狩衣 白布袴 壺睡中

熊行騰 餌囊 紅襖 烏頸劔

一犬飼装束

帽子 緋布狩衣 緋革袴

○定基卿答

一冠厚額薄額透額

銚抄曰年少之人用薄額近代依有事煩不依年齒用厚額僻事也中年人或用半額 三光院内府故実清譚曰厚額常之冠ノ事ニ薄額透額ハ同物ニ故実清譚曰自元服至十六歳用透額之冠冠之額ヲ年月形ニ据透ニ裏面ハ羅ヲ総通シテ物ニ思按此說聊不耳心

半月形者銜按所載之半額也或稱半透額貞和六年
正月十六日野宮内府公清公記曰冠透額半透額之冠
師說也額一方半かり透也且常事也故御厨子所預前
備前守宗恒朝臣令申問いふる事書平ノ像を見
や作三冠ノ額一面ニ羅をりて法た家牌と書いふ事
と穿の透額ゆいしゆは流むる半月形ノ半額と
の透額一面ニ羅をりて流たる透額勿論の至十六歳用
薄額一流九家ゆいしゆは流むる衣束按曰近來十五歳迄
ハ薄額十六歳已後ハ厚額とゆいしゆ日記と考むる若年
浅官の人ハ十六已後ハ厚額とゆいしゆ由んてり系
極大固ハ才歳左大臣の時とゆいしゆ固ハ延久三年事
後ニ条殿ハ才二内大臣の時とゆいしゆ寛治七年の事

宇治左府ハ十八歳也とも内大臣の時始々々厚額を用ひ
傳り台記久末二七右大将兼長不觸余用厚額冠事
問之陳云陛下謂余十八歳用之仍所用之作余為大臣
不用之汝雖同歳官早甚不當自今以後可用厚額者
已上冠儀分明ニ流仍不載因復

細燕尾

燕尾ハ名むとも假名書さし和名抄唐韻云纓於燕
尾冠纓野見也此ハ細纓とゆいし武官六位以下事のこ
る流とゆいし細燕尾とゆいし

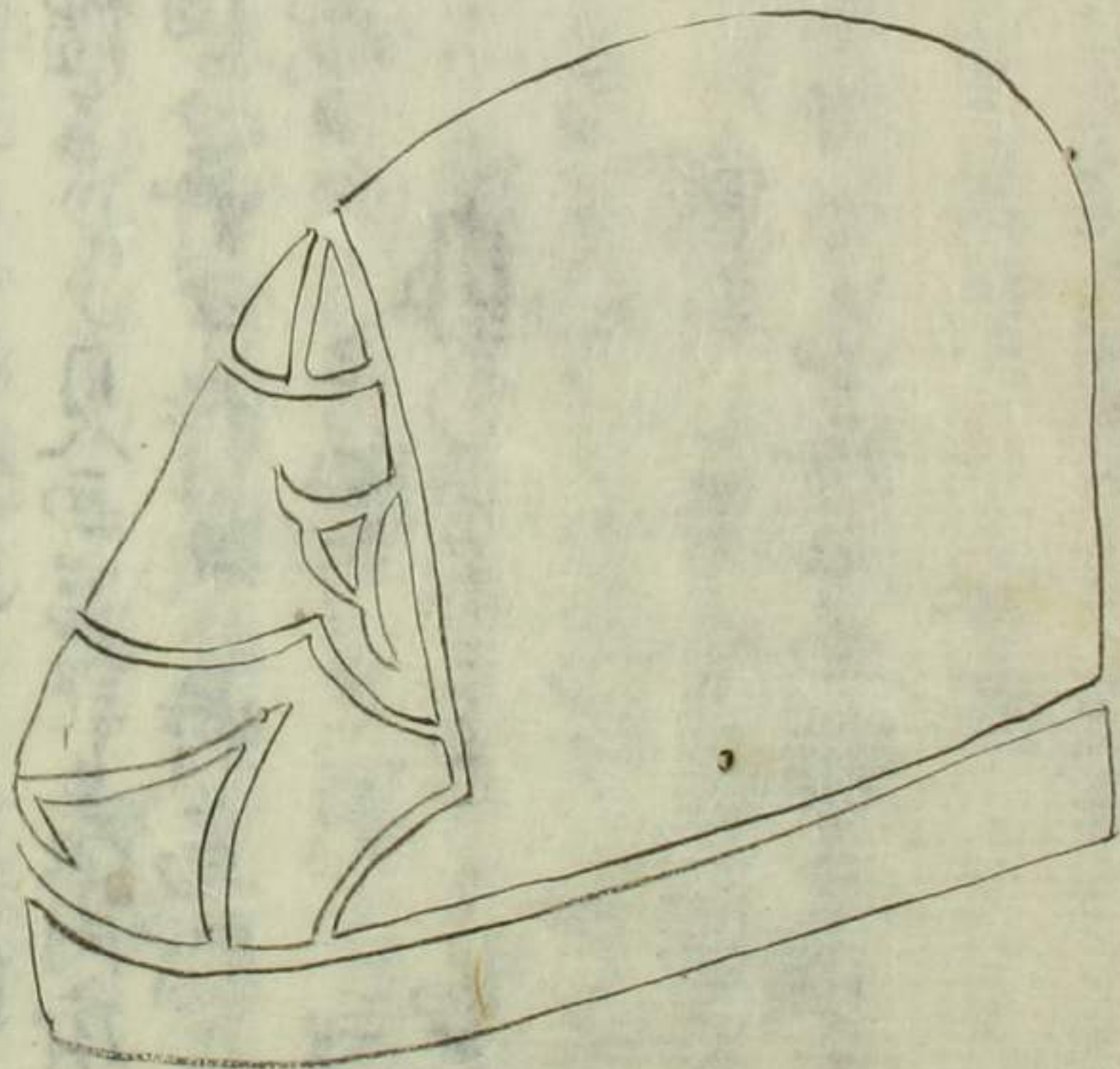
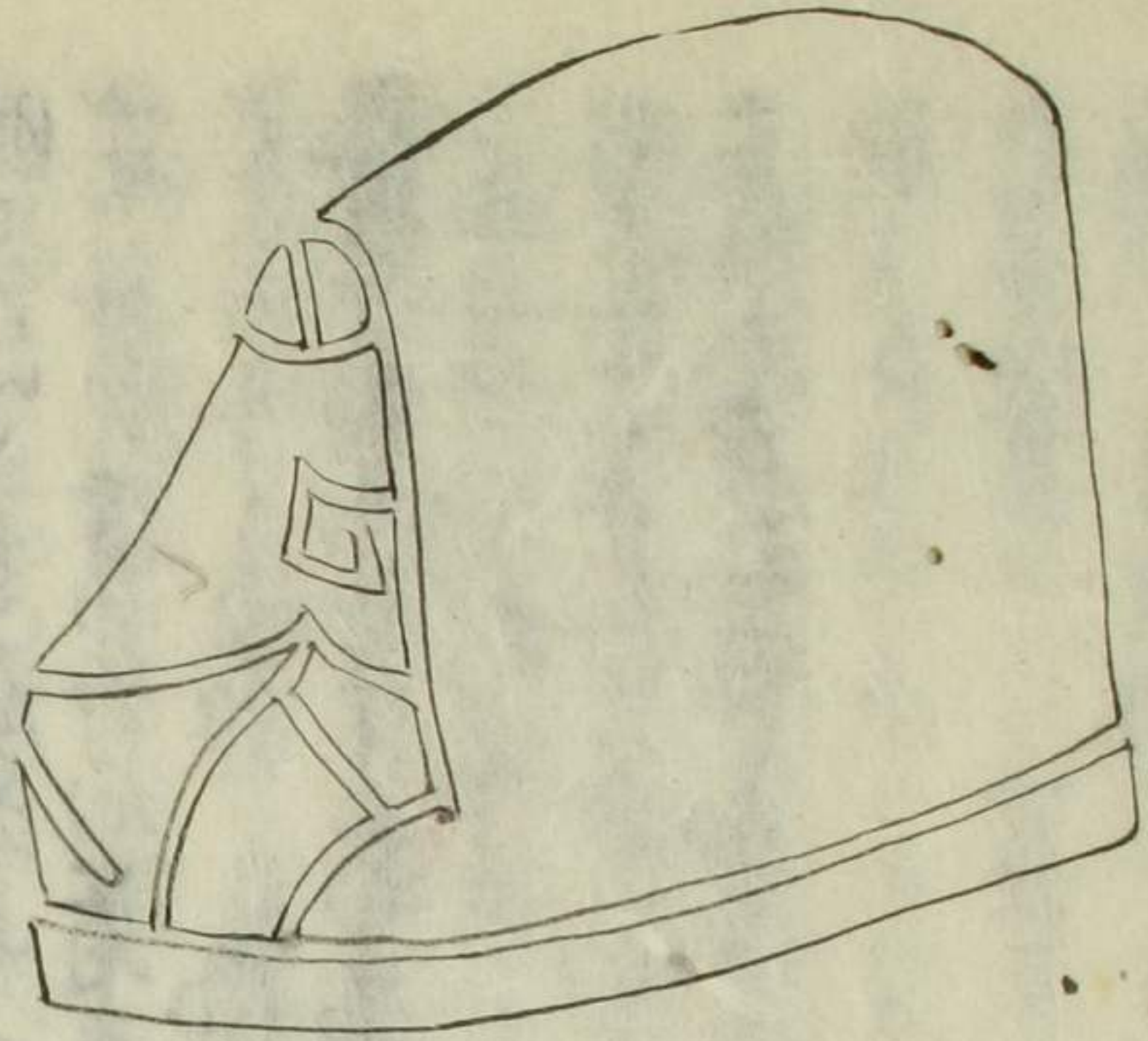
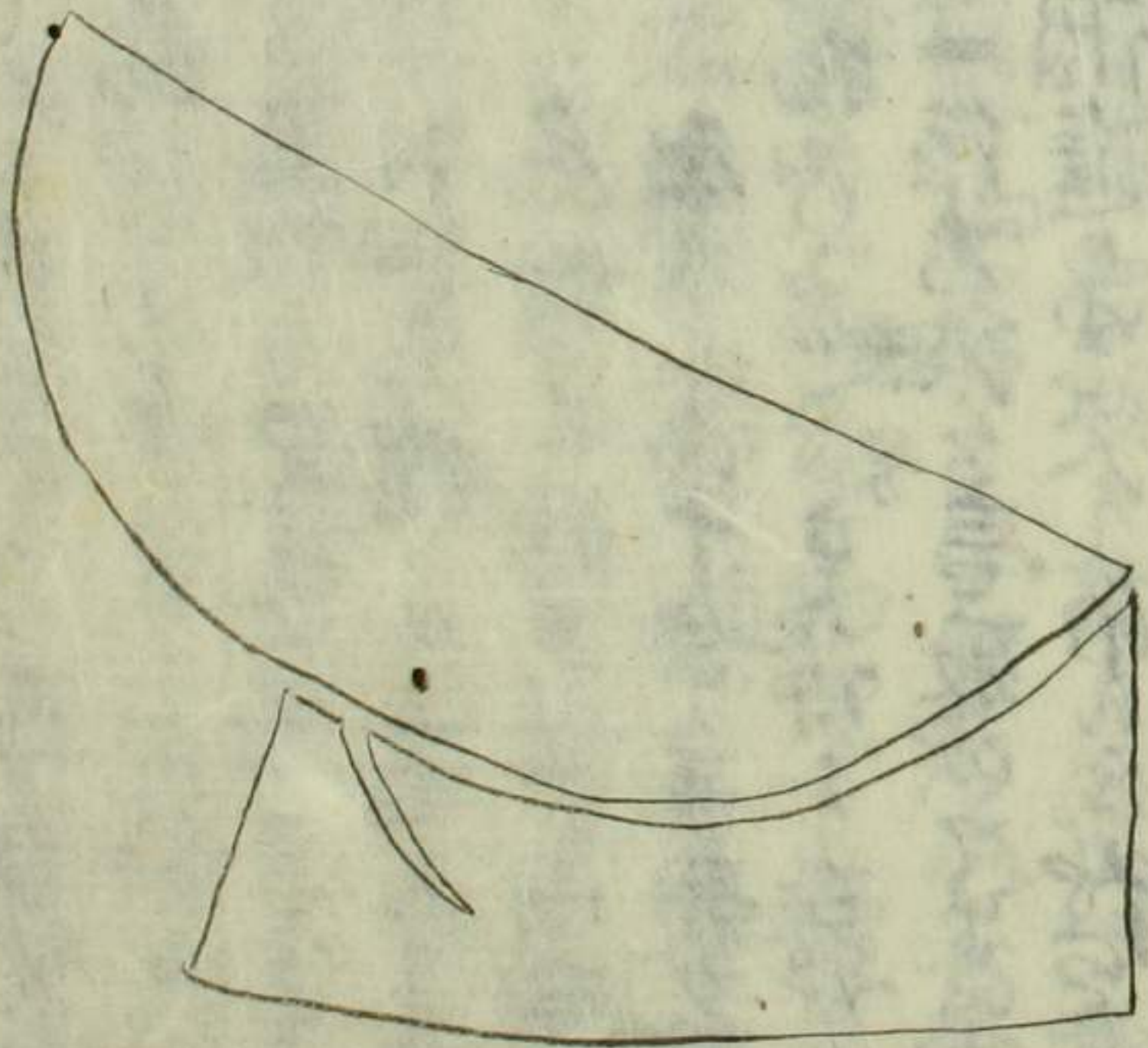
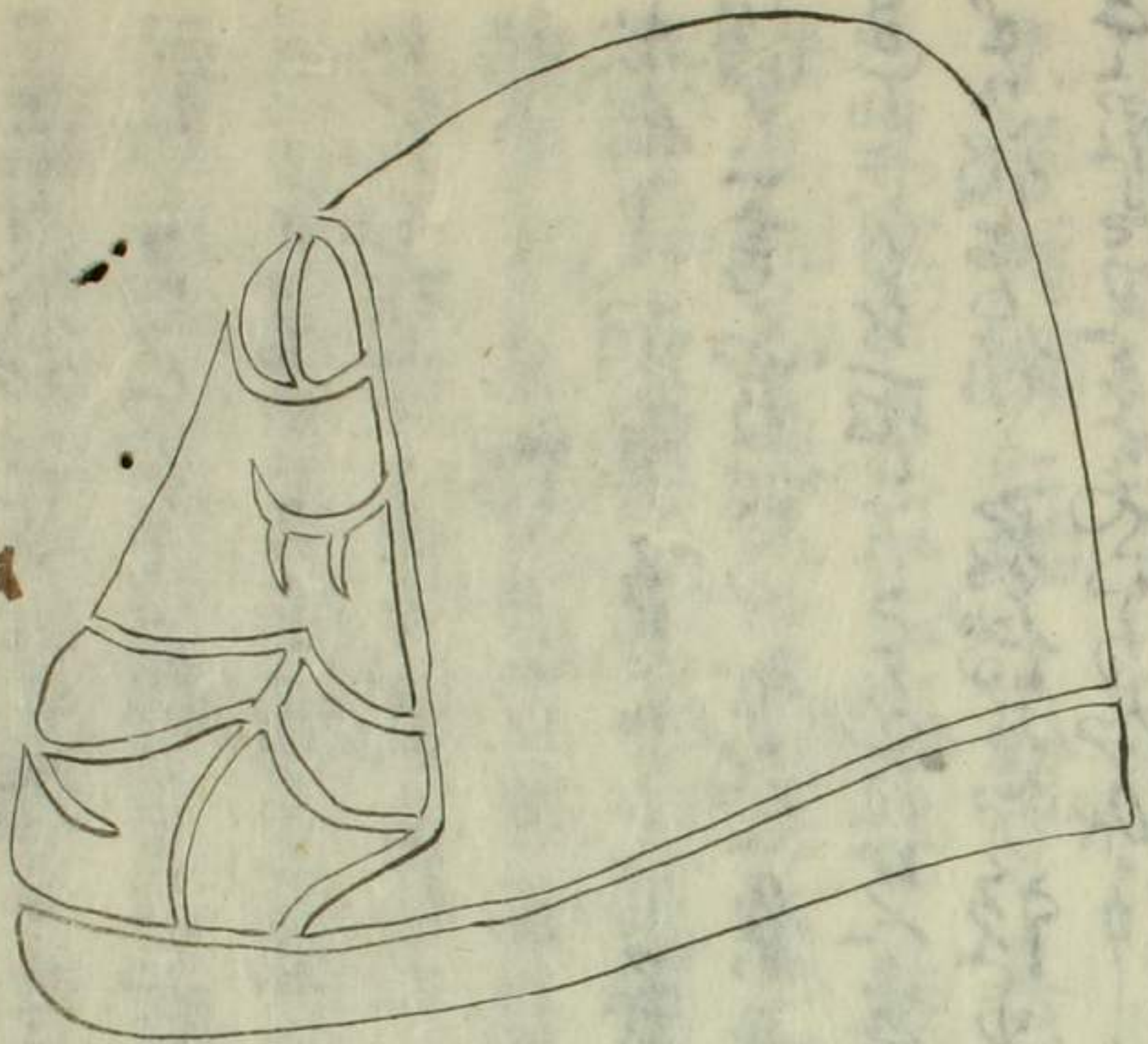
鳥帽 鳥帽子左眉 中法眉風折平礼細鳥帽子

引鳥帽子もも鳥帽子淡塗鳥帽子佐比鳥帽子

鳥帽子はなはな鳥帽子鳥帽子はなはな鳥帽子鳥帽子はなはな鳥帽子風折

お尋ねの鳥帽子は、昔は、
おのゝ名も、鳥帽子の、
りとも、あつた、
り、
額、
但、
出、
鳥、
ひ、
な、

鳥帽子の、
時、
の、
内、
子、
子、
子、



梅 表白 裏種芳

寛治五年四月十八日 後三条院白 御通記曰 梅下守前法親等
緝地法親三年四月二日 朝親行幸山槐花 中内府曰 左大臣以下
志前所記 御通記 御通記 御通記

紅梅 表紅梅の色裏種芳

仁平二年二月廿六日 大饗台記曰 皇后宮女進多實頼鞠座袍紅梅
字文下重明承淳文表袴九柄 承淳元年三月廿七日 蓮花玉虎 塔供養
葉曰 行事左右中將通親朝臣 志前所記 御通記

梅 表白裏種芳或紫

久安二年二月廿七日 承淳台記曰 今日予忌 慶後梅下守表袴安元二
年二月廿七日 法皇幸 玉葉曰 園白白位袍梅 二倍織物 文出葉法白浮

梅前承 表萌承 裏赤花或紫

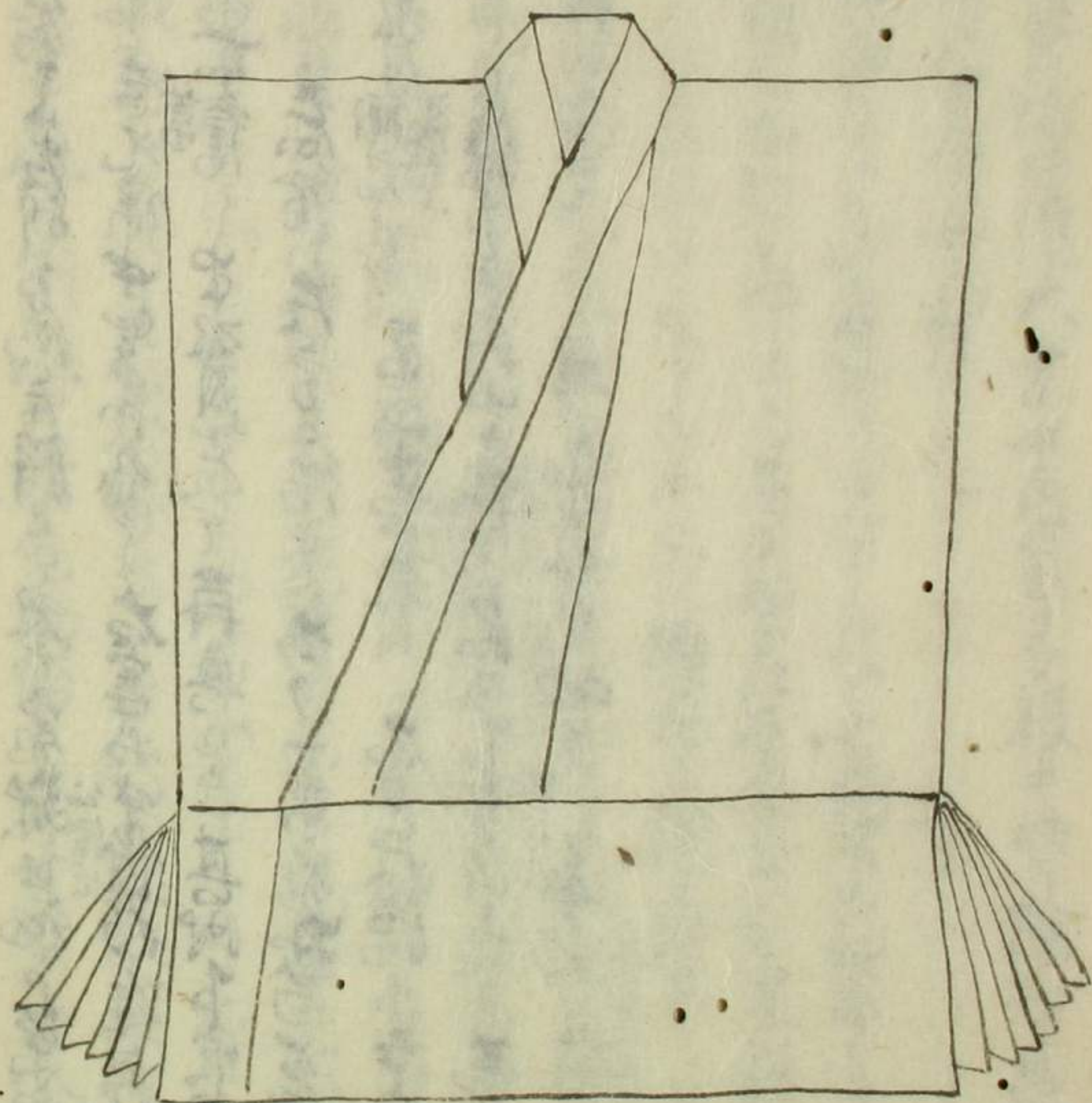
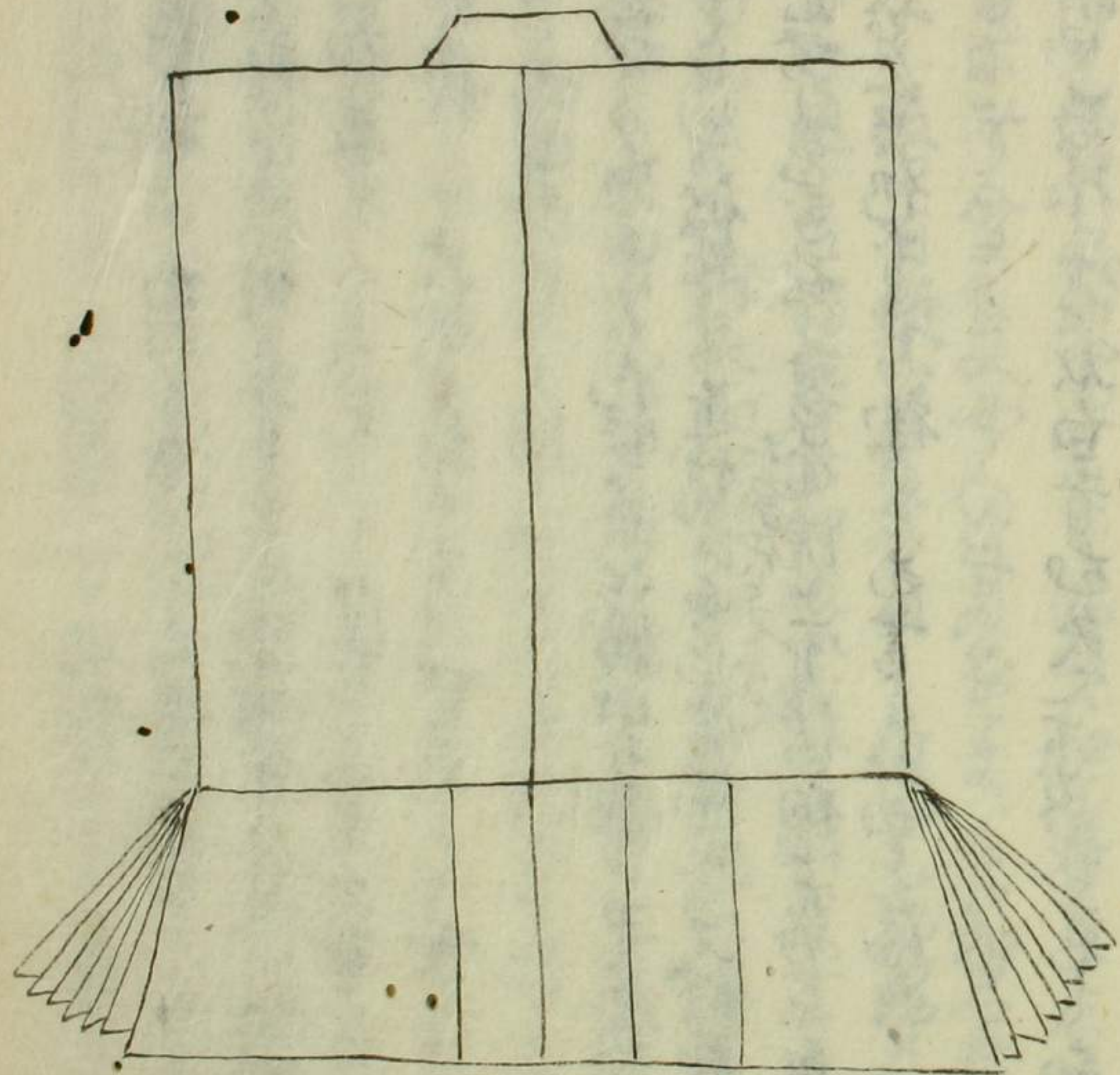
寛治六年二月廿七日 八幡諸 後三条院白記曰 位中將梅前承
前法親 安元二年二月廿七日 惟聖五十 玉葉曰 已四忌 承淳梅前承
文織物 喜袴又曰 守國梅前承 堅文織物 承淳文織物 白浮文表袴

樺梅 表種芳 裏赤花或表種芳

治承三年二月廿七日 承淳台記曰 承淳承淳梅前承
織物 承淳承淳表袴 承淳二年二月廿七日 御親 玉葉曰 右將
承淳文樺梅下織物 折 白浮文表袴

柳 表白裏種

天養三年四月廿日 朝親 台記曰 今日 承淳下合 承淳唐後下室 讓色
唐後表袴 承淳元年三月廿七日 法皇五十 中内府 玉葉曰 園白白位 承淳文織物
柳下室 承淳文表袴 又曰 左大臣柳後下室 承淳承淳 承淳承淳



世後 禮を衣被禮者衣... 被禮者... 侍中群要曰供... 加禁過... 書者之者... 宣旨者何用之... 衣冠亦為... 禮勿論

所^レ道衣

天子親の所^レ被... 禁秘... 衣冠... 宣旨... 禮勿論

